（研究論文）

教材として用いる演習事例に関する研究

播本　雅津子

An Examination of Practice Examples as Teaching Materials

Kazuko Harimoto

要約

介護福祉士養成課程において、模擬事例を用いて演習を行っているが、その演習事例は講義の目的に応じて教員が作成することが望ましいと考え、実践している。事例は、授業の目的に応じていくつかのタイプを作成し、さらに用いる順番にも配慮や工夫をしている。介護過程の展開の学習においては、学生に与える情報の内容を吟味し、事例について深く考えながらも、介護過程が学べるような事例作成を行っている。その授業の実践から、演習事例作成において配慮すべきことや、その活用方法について述べた。

キーワード：演習事例　介護過程　事例作成　教材作成

2004年12月8日受理

1．はじめに

介護技術を教授するにあたり、模擬事例を用いて演習を行うことがある。筆者は、事例を用いるときは演習の目的に合わせた情報が提供できるように、自らが関わり知っている事例から作成した、独自の教材を用いるように心掛けている。倫理的配慮として、氏名はもちろんのこと、生活背景や心身の状況などから、個人を特定して連想されることがないよう、教材事例作成には多少の脚色を加えている。

ここでは、その教材となる事例の一部を紹介し、また、事例作成における留意点や工夫などについて述べ、その事例に盛り込む内容や、それを用いる授業の展開について考える。

2．演習事例を用いる授業について

介護技術演習の中で、模擬事例を提示して学習するのは、介護過程の展開や、居宅介護の場面展開などである。事例の場面は、生活全体を紹介するもの、関わりの一場面を紹介するもの、利用者の背景を紹介するもの、事例検討会に提出される形式など、角度や様式は様々である。これらの事例を授業の目的に応じて使い分けて、学習効果を高めている。

授業は教員対学生全体で質疑応答する場合、グループワークを実施してから各グループの発表に教員がコメントする場合、全体での質疑を踏まえて個人ワークをする場合など、適宜様々な方法をとっている。

3．様々な事例と演習の展開

1）ロールプレイ用事例

居宅介護におけるコミュニケーション技術を学ぶためのロールプレイ演習のために事例を作成した。事例を用いる意図は、訪問介護を実施するにあたって、事前に必要な情報とは何かを知ることと、利用者のみ、または利用者と家族に、ヘルパーが一人で対応しなくてはいけない状況を具体的に印象付けることである。ロールプレイ演習は３～４人のグループに分かれて、事例に示した会話の続きを話し合い、ロールプレイ形式で１事例につき、展開に違いのある２～３グループが発表をする。導入から対応の難しい事例まで、３～５事例を準備し、ロールプレイに慣れながら学習を進められるよう工夫している。ここでは３事例を紹介する。

事例１

「ホームヘルパーの受け入れに拒否を示す利用者」

登場人物：利用者（82歳、男性、独居、要支援）、ホームヘルパー

場　　所：利用者宅の玄関

状　　況：２回目の訪問。１回目は介護支援専門員と同伴したため、初めての単独訪問である。前回は、別居の家族も同席していた。そして、家の中も見せてもらい、援助内容についての合意を得た。今日の訪問の目的は生活援助で、居室の掃除、調理の支援である。

会話の始まり

ホームヘルパー

「こんにちは。ヘルパーの○○です。よろしくお願いします。」

利用者

「やっぱり自分のことは自分でしますわ。帰って下さい。」

ホームヘルパー

「・・・・・・・・・」

事例２

「利用者が介護を拒むときの対応」

登場人物：利用者（75歳、女性、家族と同居で昼間は独り、要介護２、認知症高齢者日常生活自立度Ⅱa)、ホームヘルパー（女性）

場　　所：利用者の居室

状　　況：週２回の訪問を実施し、３か月目である。利用している介護サービスは訪問介護と福祉用具のレンタル、住宅改修である。週２回の訪問のうち、１回は通院介助、１回は身体介助と生活援助である。物忘れがあり、衣服の着脱や入浴には見守りや声かけが必要である。家族の介護による入浴は休日に行われている。ヘルパーはいつも入浴後に着ていた服や使ったタオルを洗濯し、乾燥機に入れるところまで実施する。

会話の始まり

ホームヘルパー

「さあ、○○さん、今日もお風呂に入りましょうか。」

利用者

「今日はええわ。あんた１人で入ったらよろし。」

ホームヘルパー

「あら、身体のお具合が悪いんですか。」

利用者

「もうすぐ息子が帰ってくるから息子に手伝ってもらうわ。」（作話）

ホームヘルパー

「・・・・・・・・・」

事例３
「家族が利用者の問題行動について
強く訴える場面」
登場人物：利用者(79歳、女性、息子家族と同居、要介護１)、ホームヘルパー、息子の配偶者（主介護者）
場　　所：利用者宅の玄関から居室まで
状　　況：週１回の訪問を実施し、２か月目である。利用者や家族との関係も成立してきた。今日の訪問の目的は身体介護で、利用者と一緒に散歩と買物をする予定であった。ところが訪問するなり、介護者が利用者本人の前で介護の現状について勢いよく話し始め、利用者は横ですまなそうにうつむいている。
会話の始まり
ホームヘルパー
「こんにちは。」
介護者
「あ、ヘルパーさん、聞いて下さい、このところお漏らしばっかりで、洗濯の山なんですよ。トイレに行くよう時間を見て促すんですが、なかなか行かないし、行ったときは間に合わなくて、廊下やトイレの中がびしょびしょになっているんです。毎日ですよ、段々腹が立ってきて。それに夜も何度か起きて、家の中をうろうろしたり、電気を付けたり雨戸を開けたりして、家族みんなで寝不足なんです。おかあさんは昼寝をするからいいけど、こっちはそういうわけにいかないし。」
ホームヘルパー
「・・・・・・・・」

事例１は、ロールプレイ演習の導入に用いている。場面設定と会話の初めだけが示されており、その続きを考えて役割演技する演習に初めて取り組む学生もいるためである。ロールプレイの進め方についても説明をし、各グループで話し合いを開始する。学生は「帰って下さい。」と言われても帰るわけにはいかない状況である、ということはすぐにつかめるが、そこから先に進めるグループと進めないグループが出てくる。進めるグループは、事例に書かれた情報全体に着目しており、進めないグループは、利用者と１対１という状況で、何と返答したらよいかという点のみに気が捉われている。そこで、２回目の訪問であることに着目して、１回目の訪問での合意事項を再確認したり、この日の目的である掃除や調理ができているかどうか、という点を話題にして話を進めているグループからの発表を聞くことで、ロールプレイ演習のためには、示された事例の情報すべてを活用していくことに全員が気付く。そして、この事例１を用いたロールプレイ演習で、すべての情報に着目するとよいことがわかり、次の事例に取り組みやすくなる。

事例２は、認知症高齢者と接する場面について考えることを目的にしている。場面設定が居宅のため、対応する時間が限られている、という条件下での対応となる。事例１でロールプレイに慣れるため、グループごとに様々な展開が考案される。他のグループの発表を聞くことも大いに学習になり、活気付いてくる。息子が帰ってくると言う利用者に、まだ帰宅しないということを納得させる会話展開、入浴する気分になるように、浴室へ誘い入浴剤を選んでもらうという展開、まず部分清拭や足浴を実施して入浴意欲を高めるという展開、洗濯のために着替えだけでも勧めるという展開、認知症のためひとまず別の話をしてから改めて入浴の声かけをするとさっき断ったことを忘れて入浴に応じるという展開などである。この事例に取り組むことで、認知症高齢者に対応する場合の基本となる、うそでごまかさないことや、否定ばかりしないということ、また、介護職のとっさの判断で、場面展開に違いが出てくるということなどが学習できる。

事例３は対応の困難な状況を設定したものの

一例である。ホームヘルプにおけるチームケアについて考えることを目的としている。ロールプレイ演習に慣れてきた学生たちは様々な会話を思いつくが、介護者に同調して利用者を責めてはいけないことと、利用者をかばうような発言をすると、介護者との関係が悪くなるということに気付き、場面展開の難しさを訴える。ヘルパー訪問中は主介護者に気分転換をしてもらう、利用者と主介護者と別々に話を聞く、利用者と散歩と買物に行って身体を動かすことで、夜間安眠につなげる、といった案は出てくるが、どのような言葉を掛けたらよいのかは難しい。そして訪問した家庭での問題に対して、すべてヘルパー１人で対応しようとすることは無理であることに気付いていく。主任ヘルパー、介護支援専門員などに報告や相談をして、介護者の強い訴えを受け止める体制作りの必要性や、利用者の状況について再アセスメントをして介護サービス計画の立て直しが必要である、という教員のコメントにより、チームケアの必要性が学習できる。

実際の授業では、時間配分を調整しながら、５～７事例用いて演習を実施している。ロールプレイ用の事例は情報が少ないので、必要に応じて利用者の状況や家庭内の様子などの情報を補足する。演習にうまく取り組めない学生から「こんなこと、本当にあるのか」という質問がでることがあるが、「ある」と断言し、情報の補足もできることが、自己作成事例で演習を行う強みである。

２）介護過程の展開・介護計画作成の学習用事例

介護過程の展開を、事例を通して学ぶためには、まず事例に関する情報収集が重要となる。近年介護計画作成のために、様々なアセスメントツールが開発されているが、たくさんの項目を埋めていく形式のツールを用いると、学習者は何のために情報収集をしているのかがわからなくなることがある。できれば情報収集は、基本的に知っておくべき内容や、その事例の介護計画を作成するために知りたい情報は何かを、自ら整理しながら行うことが必要であると考える。そこで、情報を最小限にした事例紹介で情報収集の視点の学習をしてから、多くの項目にわたる事例で学習するという順序で学習をすすめている。

情報を最小限にした事例は表１に示すように演習シートに事例の概要と主訴を示し、必要な情報は何かということについて考えるように進める。

表１　演習シート

事例の概要	64歳　女性　要介護４　介護老人福祉施設に入所中。アルツハイマー性認知症で、会話が成立しない。発語は「お父さん」(夫のこと)「ぽっぽっぽ」(意味不明)など。若いときから健脚で山登りが趣味であった。毎日施設内の廊下をずっと歩いている。食事は誘導で可能。 排泄は訴えができず、オムツ使用。
主訴	(本人は表現できないが、楽しく歩いていたいようである。)
問題解決のために必要とする情報	・食事は摂取できているか。水分は摂取できているか。便秘はしていないか。徘徊によって怪我をするおそれはないか。他の利用者との確執はないか。他に楽しみはないか。
新しく得た情報	・歌が好きで、歌詞は歌えないが童謡やよく知った歌の時は手拍子をする。食事はきちんと摂取している。水分摂取量も良好。便秘はしていない。睡眠も良好。歩き方に勢いがあり、他の利用者とぶつかると、他の利用者が怪我をするおそれがあると思われる。今までにぶつかったことはない。人の区別は夫だけがわかる。
利用者の生活に起こっていること(ＩＣＦの考え方で記述する)	・認知症があるために、施設の廊下を歩き続けるという行動を一日中続けている。 ・歩くことは本人にとって若い頃からの趣味であり楽しいようである。 ・施設の廊下は巡回できるような構造になっており、危険は少ないと考えられる。
具体的な介護計画	・廊下を自由に歩けるように物品を置かないようにし、自由に歩いていただく。 ・食事、水分摂取、排泄などの声かけ、誘導を行う。 ・他の利用者が廊下を利用し、ぶつかると危ないと考えられるときは、スタッフが手をとり、歌を歌うなど、本人の興味をひきつける。

この演習シートに、事例の概要と主訴の欄を記入したものを学生に配布し、問題解決のために必要な情報は何かを考える。この時に様々な質問が出るが、その質問がなぜ問題解決につながると考えるのかを、ひとつひとつ検討しながら情報収集をすすめると、利用者像が明確になるとともに、限られた情報から次々と関連する情報を引き出すための視点や質問の仕方が養われる。この問答を学生とするためには、演習事例についてモデルケースを元に、様々な情報を整理しておくことが必要である。そして、事例の状況説明は、ただ読み上げるのではなくできるだけいきいきとした表現で学生に伝え、紙上に書かれた事例が実在の人物であることを印象付けることが大切である。情報として分かりにくいところは、質問をすれば返答がある、という前提で事例を用いることが、演習事例を自己作成する大きな意義である。

事例４
事例の概要：75歳男性　要介護２　介護老人保健施設に入所して１ヶ月。左半身麻痺があり、杖歩行または車イスで移動。理学療法士によるリハビリテーションには積極的。
主　　訴：レクリエーションが嫌いで参加したくない。子供だましのようなゲームはしたくない。

事例５
事例の概要：92歳　女性　要介護１　介護老人福祉施設に入所している。寝つきが悪く、11時から２時ごろまで何度もナースコールを押し、不眠を訴える。客観的には適度な睡眠を取っているようである。排泄はトイレで自立。
主　　訴：夜寝つけない。眠れないときに他の部屋でいろいろ音がするのが気になる。

事例を提示し、問題解決のために必要な情報は何か、について学生が検討を始めると、主訴とは離れた観点の、「家族構成」「家族の面会頻度」「同室者との人間関係」等の質問が先に発せられる。それらの質問をする理由は「施設生活が寂しいのではないか」という前提が気持ちの中にあるからだということが質問の理由を尋ねると伝わってくる。事例の概要を発展させる質問が出るまでに、施設生活に対する順応性についての質問が続くが、これは、これまでに学生が実際に施設入所者と接した印象から、施設生活は寂しいという先入観による質問と考えられる。それらについての疑問が解決してから、主訴に関して具体的に情報を得ようとする傾向を、演習を進める中で感じる。事例４では、現在実際に行われているレクリエーションはどのようなものか、本人の趣味にあったレクリエーションを勧めたことはあるか、事例５では、不眠の訴えに対して実際に行われている介護は何か、といった主訴に沿った質問が出るまで、学生を誘導する必要がある。そのためには、話題が逸れているときの質問に対する返答と、核心に迫る質問に対する反応や返答に変化を持たせながら、様々な質問に応答する。概要には少ない情報を示しても、事例に関して広範な情報把握をしていないとこの情報提供ができないので、モデル事例を元に、しっかりと事例背景を組み立て、問題点の整理をし、日々実施されている介護についても知っておく必要がある。

事例４，５のような事例紹介と情報収集の演習を４～５事例取り組むと、学生は、主訴を中心に実践されている介護に興味を持って情報収集するという視点を持ち、思いこみからの質問が減り、問題解決に迫る情報を集めることができるようになる。

事例６は、一連の介護過程の展開の学習のために作成した事例である。要介護度や家庭での福祉用具の使用状況などいくつかの必要不可欠と思われる情報を故意に省き、質問が出るように作成している。また、利用者本人や家族の考え方は前向きである。初めは問題点が少なく見

えるが、専門的にアセスメントすることでいくつかの問題に気付き、アセスメントの必要性が理解できるように作成した。

事例６

○プロフィール

Ｙ．Ｈさん、81歳、女性。夫とは戦争中に死別し、一人で息子を育ててきた。60歳まで経理の仕事をしていた。その後は、家庭で家事を担当しながら、書道教室へ通ったり、自宅で洋裁やパッチワークなどの趣味を楽しんでいた。友人が多く、友人との交流も盛んであった。

平成１５年４月に脳梗塞を起こし、左上下肢に軽度の麻痺が残った。脳梗塞発症後は、家族と友人に支えられながら生活を行ってきた。明るく前向きな性格である。

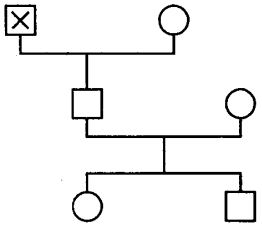
○本人の全般的な生活能力

歩行は、杖や壁につかまりながら行っている。バランスを崩して転倒したことが2回ある（今年３月と5月）。外出には杖と車イスの両方を準備し、人通りの多いところは車イスで介助を受けていた。排泄は、トイレまでの歩行に若干時間がかかると思われるが、排泄動作も自分で行っている。入浴は、浴槽への移動の見守りを受け、背中など、自分で洗いにくいところは介助を受けたり、自助具を活用したりして、多くの介護を必要とせず実施している（入浴の準備や浴槽の掃除などは家族が行う）。衣服の着脱は、洋裁の上手な友人に手持ちの服を改良してもらったため、ほぼ自立して行っている。刺繍や塗り絵（水彩画）など、友人にある程度の準備を手伝ってもらい、以前からの趣味も一部継続している。

○家族構成・介護力の状況

５人暮らしで、主介護者は長男の妻である。乳がんの疑いで、近々入院する予定である。家族は介護に協力的で、みんなで本人を支えている。

（家族関係図）



○本人や家族の希望

◎本人の希望

長男の妻の入院にあたり、在宅生活が難しくなるため、約３ヶ月の介護老人保健施設への入所を希望している。歩行訓練をがんばって、杖歩行を安定させたいという希望がある。また、レクリエーションへの参加も意欲的で、いろいろな習い事や経験をしたいと言っている。自分のことは、できるだけ家族や介護者の手を借りずにやっていきたいと希望している。長男の妻の体調が安定したら、今までどおり家族と一緒に自宅で生活したい。

◎家族の希望

家族みんなで暮らしたいので、この数ヶ月をそれぞれが協力して乗り越えていきたい。長男の妻が家事を十分にできない間は、長男や孫たちが家事を積極的に実施する予定である。長男の妻が安定したら、また全員で一緒に暮らしたい。

事例６は、本学で実習に用いる様式と、施設介護サービス計画書の標準様式を用いて、介護過程の展開を紙上で実践しながら、各様式の記入方法の学習に用いている。この事例は前向きな介護実践が行われ、問題点を整理しやすく、介護老人保健施設を一定期間利用した後に家庭復帰が見込まれる事例である。施設実習などではもう少し困難な事例もあるかと思われるが、学生が紙面を中心に状況を連想するには主訴や問題点が明確な事例での演習が望ましいと考えて作成した。事前に主訴を素直に受け止める学習をするため、必要と考えられる情報の収集も順調に進み、一連の介護過程の展開の学習を円滑に進めることができる事例であると考えている。

このように、事例学習は学習展開や学生の反応を予測し、それに対応する方法までを準備しておく必要があるため、教員にとって情報の多い事例、すなわち、独自に作成した演習事例を用いることが、演習展開において大変重要であるといえる。

４．考察

事例を用いた演習を講義で実施する場合は、そのモデルとなった利用者や介護場面について幅広く知っていることが不可欠である。そして学生への情報の提供を円滑に行い、紙面から人物像や場面が予測しやすい事例を用いることが望ましいと考える。また、事例を用いた演習では、一つ一つの事例に対する学生の反応を予測しておくことが、授業の展開に必要であると感じている。すなわち、学生の反応や状況理解がしやすいように、授業実施後に事例を通じて提供した情報や、学生の反応を整理して、事例の再検討を行い、改良して用いることが必要である。改良を加えて次の年度で用いる場合は、時系列的に古さを感じさせないものを提供できるよう、部分的に修正する。教科書や参考図書に掲載されている事例は、その時代背景に沿った問題点が含まれていることがある。現在では介護保険制度実施前後によって、福祉サービスの用い方に違いがあるため、現時点の制度に沿った事例を用いるべきであると考える。しかし、全体を把握していない事例について細部を変更すると、どこかでつじつまが合わなくなってしまう。演習事例作成は教員自身が行うと、そのような問題も発生せず、個人情報の保護のために一部情報を入れ替えたとしても、バランスのとれた事例を提供することができる。

演習用の事例作成は、事例検討会の資料作成とは違い、問題点が多くない事例が適していることもある。そのために教員は、日ごろから介護現場との交流や、居宅介護の実際を見聞する機会を持ち、新しい制度のもとで展開する事例を多数把握する必要がある。演習事例は毎年改良を加えながら作成し、３年程度で全体が入れ替わるぐらいの頻度で新しいものを作成していくと、介護場面や実践の記憶も新しく、紙面に書かれた情報が立体的な印象で学生に伝わるように説明できると感じている。

教材としての演習用の事例作成は、通常の事例検討会などに提出する事例の書き方とは違い、授業の目的や学生に与える課題によって、情報量の調整をする必要がある。説明をするときも過不足なく、特に過剰な情報を提供してしまうことなく演習を進めていくことは、教員の力量のひとつであると考えており、教育現場独自の事例として、様々な様式を準備することも望ましい。介護福祉士養成教育の中で、特に介護事例に関する教材作成を教員が積極的に行うことは、授業展開をする上で大変重要なことであると考えている。

５．おわりに

今回、介護福祉士養成に携わる中で作成した多くの教材としての事例に注目し、教育の中で果たしている役割について検討した。大切なのは事例を作成することだけではなく、どのよ

うに授業の中で用いるか、その提示する順番も学習を進める上での大切な要因であることを再確認した。これからも教材作成に取り組めるよう、介護現場との交流や介護場面への参加を心掛け、さらに良い物を作成できるよう努めていきたい。

末筆ながら、教材作成のモデルとなった方々、介護の実際を生の姿で教えて下さった多くの方に感謝の意を表したい。

参考文献

1　介護支援専門員実務研修テキスト作成委員会編集『介護支援専門員実務研修テキスト』財団法人長寿社会開発センター　2002年。

2　福祉士養成講座編集委員会編集『新版介護福祉士養成講座13　介護技術Ⅱ』中央法規　2003年。

（はりもと　かづこ　本学講師）